



中国がわかるシリーズ16 晋の東遷

ライフネット生命株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口治明

280 年に、中国を統一した晋(西晋)の武帝は、軍を帰農させ、占田・課田制(均田制の祖形)に基づく戸調式(課税を人頭税から戸単位に変更)を始めるなど、戦時国家から平時国家への転換を企図しました。司馬氏は、篡奪者ではありませんが、経世済民の志がなかった訳ではありません。しかし、特に治世の後半になって遊興に流され、盛り塩の故事を残した武帝が 290 年に没すると、暗愚な 2 代恵帝の下で、権力を巡って皇族間で争いが生じました。これが八王の乱(291～306)です。

武帝は、魏の峻厳な皇族政策を反面教師として、皇室の藩屏となるよう、皇族である司馬一族に兵権を与えて、各地に分封していましたが、これが裏目に出た形となりました。[東]漢、三国時代から傭兵などにこき使われ中原に移り住んでいた匈奴や鮮卑は、この混乱に乗じて自立を考え始めました。南匈奴の単于の末裔である劉淵は 304 年、山西に自立して漢を立てました(～329 年。後に[前]趙と呼ばれた国です。漢室と匈奴は、通婚していましたので、劉淵には漢室の血が流れていました。漢を建てたのは、劉淵に漢を再興する気概があったからだと思われます)。

同年、成都では、テイ族の李雄が自立しました([成]漢)。このようにして、いわゆる五胡十六国時代(～439 年)が始まったのです(五胡という言葉は、差別用語であるとして、東晋十六国時代という言葉も使われています)。311 年、劉淵の漢軍は晋の首都、洛陽を攻め落とし(永嘉の乱と呼ばれていますが、実態は、晋から漢への王朝交代です)、晋は、事実上、滅亡しました。313 年、朝鮮半島の楽浪郡、帯方郡も、高句麗などに攻められて滅亡しました。八王の乱から 20 年を超える戦乱で、華北全体が衰亡し、人口は激減したのです。この真空地帯に、大量の遊牧民が雪崩れ込んできました。この時代に中国の社会は、大きく変容しました。遊牧民の椅子やベッドの生活が、当り前のものとなったのです。('テイ'は'氏'の下に'一')

中国に五胡が大挙侵入した半世紀後、ユーラシアの西方でもフン(匈奴)族の登場を契機として民族大移動が始まりました。おそらく、気候の変動などにより、北方の草原地帯の環境が悪化し、ユ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ーラシア中央部の遊牧民が移動を始めたことが根本的な原因だと思われます。[東]漢から5世紀まで、気温が下がり続けたという研究成果も発表されています。五胡十六国とゲルマン民族の大移動は同根であり(中国は南に、ローマは東に難を避けた)、[北]魏、隋・唐の拓跋帝国やカール大帝のフランク王国は、移動した異民族が漸次同化し建国に至ったという意味では、これもやはり同根なのです。

「盛り塩の故事」について少し説明しましょう。晋の武帝、司馬炎は、呉を滅ぼした際、呉の後宮を吸収しましたので、武帝の後宮は、1万人の美女を擁することになりました。武帝は、羊に曳かせた車で後宮を周っていたのですが、ある宮女が、羊車を自らの館に停車させようと、入り口に羊の好物である塩を盛ったことから、花柳界では、盛り塩を行う慣習が生まれたと云われています。

ところで、武帝にならって晋の貴族も贅沢三昧や放蕩に耽りましたので、晋では、豪華な貴族文化が花開くことになりました。左思の「三都(三国の首都)の賦」(三国のお国自慢)はベストセラーとなり、「洛陽の紙価を高めました」。但し、紙が、竹簡や木簡、帛を駆逐するのは、5世紀初頭、東晋の時代であると云われています。

なお、五胡とは、匈奴、鮮卑、羯、テイ、羌、の5民族を指しますが、羯は、匈奴の支族にすぎませんので、五行説との関係から、五胡という言葉が生じたという説もあります。これらの異民族は、漢や三国の時代から長年に渡って、中国本土に住み着いていました。

316年、晋は[前]趙によって最終的に滅ぼされましたが、晋の一族で、琅邪王であった司馬睿(307年、琅邪の大貴族王導と共に、建業に派遣されていました)が自立して、嘗ての呉の都、建康に、東晋を建てました(317年～420年)。これを契機に、江南の本格的な発展が促されることになります。華北に、関東、関中という2つの核があったように、江南政権にも2つの核がありました。天然の要害、長江に守られた江南は、北からの攻撃には強かったのですが、長江上流からの攻撃には脆かったのです(楚から南宋まで、全て、長江上流からの攻撃が江南政権の致命傷となっています)。そこで、首都健康近辺(北府)と、長江中流の荊州(西府)の2軍団が、東晋の守りの要となりました。東晋は、王導、謝安と名宰相が続き、北伐で人望を得た西府のリーダー、桓温(～373)による篡奪の危機を乗り越えました。